The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	性的少数者の複合アイデンティティと連帯可能性 ：ナラティブ分析から見る当事者の語りを中心に
Author(s)	木場, 安莉沙
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 301-330
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

性的少数者の複合アイデンティティと連帯可能性

ナラティブ分析から見る当事者の語りを中心に

木場 安莉沙
大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程

要旨

本研究は性的少数者の人々の語りから、性的少数者間の排除や序列化の実態を明らかにし、そうしたコンフリクトの存在を踏まえた上で性的少数者間の連帯の可能性を示すものである。性的少数者間の排除とその要因を明らかにするため、性的少数者にインタビューを行い、ナラティブ分析・談話分析の観点からデータを分析した。その結果、性的少数者が構築するナラティブアイデンティティは複合的・多元的であり、排除や序列化がこうしたアイデンティティと関連して語られていること、そして様々な排除や序列化が個々の当事者に経験され、語られていることが分かった。また性的少数者間の連帯には相互の差異の承認という観点から希望があるものの、単純な「一体感」だけでは規範化・均質化のもとに個々の当事者の多様性を不可視化してしまう危険性があることから、連帯の可能性を探る上でより多様な当事者の語りとその中で構築されるアイデンティティとを省察してゆく必要性が導き出された。

目次

1. はじめに
2. 先行研究と課題
   2.1 性的少数者とは
   2.2 性的少数者のことばの研究
   2.3 性的少数者と排除の構造
3. 本研究の位置づけ
   3.1 研究の目的と展望
   3.2 データ分析上での理論的枠組み
   3.3 方法と対象者
4. データ分析
   4.1 データ分析――性的少数者の複合的アイデンティティ
   4.2 データ分析――性的少数者間の排除
   4.3 データ分析――性的少数者の連帯可能性
5. 分析結果の考察
6. 結論

キーワード

ナラティブ分析
談話分析
アイデンティティ
性的少数者
LGBT
排除

1. はじめに

近年、2012年に公営住宅法の改正に伴い同性カップルが法律上公営住宅から排除されなくなったほか、2015年4月に東京都渋谷区が「同性パートナーシップ条例」を施行するなど、性的少数者（LGBT、セクシュアルマイノリティとも呼ばれる）の存在が注目される機会が増えた。しかし、かといって性的少数者をとりまく差別や排除はなくなったわけではない。こうした問題はまだ至る所に存在する。筆者は性的少数者を取り巻く諸問題に、実際に行政やNPOなどの団体に参与することによって関わってきた。また、自身が性的少数者であることからも、性的少数者をめぐる問題、とりわけその排除の構造と要素、そして排除に際して個々のアイデンティティがどのように関連しているかに関心を寄せ、研究の主題として設定した。排除と言ってもその様相は様々であり、少数者は排除される客体であるばかりではなく主体にもなりうる。本研究は中でも、語られる機会の少ない性的少数者による性的少数者の排除や序列化に焦点を当て、個々のアイデンティティとそれらの結びつきとを探求している。何故なら多数者／少数者を問わず、性的少数者の問題を考える上で、個々のアイデンティティや人が自己や他者をどのように捉えているかは極めて重要な問題だからである。従って、人が自己や他者を捉える際に起こる差異化や位置づけが性的少数者をめぐる排除や序列化にどのように繋がり、また人々のアイデンティティがそれらとどのように結びついているかを明らかにするのが本研究の目的である。

2. 先行研究と課題

2.1 性的少数者とは

性的少数者（セクシュアルマイノリティともいわれる）は、「正常、典型的、規範的とされる性のあり方から逸脱する、全体から見れば小数の人たちを総称して呼ぶ名称」（池田ら 2003）である。このうち男性同性愛者をゲイ、女性同性愛者をレズビアン、両性愛者をバイセクシュアルという。また身体の性別は「女」「男」であるが自らの性別に対する違和感をもつ人をトランスジェンダーといい、肉体に対する違和感が強く、肉体的な改変を求めていく人をトランスセクシュアル、服装や外見に限って反対の性にしようと求める人（異性装者）をトランスヴェスタイトという（いずれも池田らを参照）。「トランスジェンダー」を広義に用いた場合にはトランスセクシュアルやトランスヴェスタイト、また自分のジェンダーを「女」「男」のどちらか（あるいは片方のみ）に断定したいと思わない「Xジェンダー」も含まれるが、狭義にはこれらとは区別され、社会的に身体性とは反対の性で生きていくことを重視する人を指す。トランスジェンダーのうち、社会的に「女性」とされているが自分が「男性」であると自認する人をFtM（Female to Male）、その逆をMtF（Male to Female）という。また本稿では取り上げないが、性的欲望を持たないとされるアセクシュアル、身体性が様々なレベルにおいて男女両方の特徴をもつ、あるいは男女どちらかに分化しないインターセックスといった人々もおり、性的少数者のカテゴリーや性的アイデンティティは多岐にわたる。これらに対し、性的指向（性的欲望や恋愛感情の対象）が異性である人をヘテロセクシュアル（異性愛者）、身体性と心の性が一致している人をシスジェンダーといい、一般にヘテロセクシュアル且つシスジェンダーである人々が性的多数者として取り扱われる。ただしいずれも厳密な定義や線引きがあるわけではなく、当事者の自己認識がどうであるかが最重要である。また「ホモ」「オカマ」「レズ」といった語彙は侮蔑的意味合いが含まれることも多いため忌避されることが多いが、当事者が肯定的に自称している場合などもあり、一概に差別的に使用されているとは言えない（非当事者も必ずしも侮蔑的に使用しているとはいえない）。しかしながらコンテクストによって様々な意味を含みうるため、これらの語の扱いには慎重さが求められる。

2.2 性的少数者のことばの研究

先行研究ではこれまで、性的少数者とことばの関係について、「ゲイことば」（Chesebro 1981）など性的少数者コミュニティ内で用いられることばからのアプローチがなされてきた。また、日本においてもテクストの研究、殊に歴史的観点からの同性愛者研究や女装研究には三橋（2008）や堀（2010）、石田（2010）、赤枝（2010）、竹内（2014）など既に一定の蓄積が見られる。しかしながら、「ゲイことば」の認知度には居住地域やジェンダーといった違いによって差があり、

同性愛者のみに普及しているゲイ特有の言語的特徴といったものは認められない点や、ゲイとレズビアンを同一視している点で批判を受けている（カメロン＆クーリック 2009など）。また、性的少数者の用いる語彙を超えたナラティブという単位での研究は海外には散見されるものの（Powell 2011など）、国内においてはその数が限られており、中でも、談話的特徴まで分析対象として取り扱ったものはわずかである。性的少数者の語りを対象とした研究についても、研究対象が男性同性愛者に偏っていることが指摘されており（杉浦 2010など）、それ以外の性的少数者へのアプローチが見られない。これらのことから、本研究では多様な性的少数者の語りを取り上げ、これまで着目されてこなかった談話的特徴にも注目し、書き言葉では表現されない部分までをも考察の対象とする。

2.3 性的少数者と排除の構造

性的少数者をめぐる排除については、多数者から少数者への排除が語られる機会は比較的多かった。例えば風間・飯田（2010）は20代の男性数名へのインタビューから、異性愛者の男性がゲイを嫌悪する要因として、男性同士の結びつきが「女性を性の対象とする」という同質性の上に成り立っているため、ゲイが「同じ方向性を向かない」異質な人間として扱われるという可能性を導き出している。また別の要因として、「自らが性的対象となることへの恐怖」があり、これは異性愛において男性を性的主体とするのが「主要なパターン」化されているためであるとしている。そしてこのパターンに沿わないことは自らの「男らしさのアイデンティティ」を損なうことを意味しており、多くの異性愛者男性はこれを危惧しているのだという。また、同じ大学に通う5名の男性グループの会話を分析したカメロン（Cameron 1997）も、彼らが自分達の設ける「男らしさ」の基準から外れる男性を「ゲイ」という言葉で表し異質なものとして侮蔑的に語っていることから、ゲイへの嫌悪を表現することが「男らしさ」を顕示するストラテジーとして機能していると論じている。これらの研究からは、異性愛者男性同士の結びつきや「男らしさ」のアイデンティティが、ゲイの排除の上に成り立っていることが示されている。

一方で性的少数者を排除の主体とする構図が語られる機会は比較的少ない。実際には性的少数者間での排除や差別は頻繁に行われており、さまざまな差異を原因に、性的少数者は差別の主体にも客体にもなっている（三橋 2010、米沢 2003）。三橋らによると、トランスジェンダー、トランスセクシュアル、トランスヴェスタイト間でも差別は行われてきた。曰く、トランスセクシュアルの「純化運動」[1]の起こりに伴いトランスジェンダーやトランスヴェスタイトがトランスセクシュアルから差別的言動を受けたりコミュニティから排除されるといったことが起きてきた。三橋らはトランスジェンダーやトランスヴェスタイトに向けた差別について主に述べているが、それ以外のカテゴリー間での排除や、それが当事者からどのように語られるかが精査されていない。そこで本研究では、先行研究では解明されていない性的少数者間の排除やそれらの語られ方について精査し、そこから表出されるアイデンティティと排除の関連について明らかにする。

3. 本研究の位置づけ

3.1 研究の目的と展望

先行研究の反省から、これまでの自身の研究では、多様な性的少数者のナラティブを対象とし個々のデータの質的分析を行うこと、そして話者が意図せずに使用している談話的特徴にも着目することを観点に入れ分析を行ってきた。これらに加え、以下の視点から本稿の分析が性的少数者をめぐる共生の土台を築く一助となり得ることを示してゆく。先述の米沢（2003）は、本来多様である性的少数者間の差異が、（自他ともに）認識されることなく同一視してこられたために性的少数者間での差別や排除を招いた事実を指摘しつつ、それでも性的少数者同士の連帯が必要であると訴えている。また、上野（1996）は「複合差別論」について論じた著書の中で、「すべての被差別者を一挙に解放する」ような一般理論または普遍主義には禁欲的態度を示しつつ、被差別者は解放の戦略を多く共有していると述べている。性的少数者間での差別がジェンダーや収入、年齢、セクシュアリティ、人種といった（性的多数者と共通する）多元的項目からなされていることからも、性的少数者間の差別は上野の述べる「相互差別」や「重層差別」「複合差別」に当てはまるが、同時に上野の言うように解放の戦略も

多く共有していることになる。また上野は先述のような一般論を忌避する一方、様々な多元的現実を生きる個人が経験する様々な差別を当事者の言語によって定義され構成される「生きられた経験」として重視し、被差別者の解放思想はこの「生きられた経験」の多様性への承認と想像力を共有するとしている。両者の立場に共通するのは、個々の（性的）少数者やその語りの多様さが重要であり、その多様さが無視されてきたために（性的）少数者間の衝突を招いたという点、そして（性的）少数者間の連帯は可能であるという点である。本稿でもこの立場をとり、性的少数者当事者の語りから多元的な排除や差別を経験する性的少数者の現実を読み解くとともに、「社会的弱者集団に属する個人のアイデンティティ複合内部の関係（葛藤）」（上野）を明らかにすることを目的とする。これにより「生きられた経験」および相互の多様性の認知を促すとともに、性的少数者の相互の連帯の可能性を示してゆくことがよりマクロな目的である。さらに、本稿の結論を先取りしておくと、性的少数者間での差別や排除の根底にある複数の項目は社会において性的多数者と共有しているものや基盤を同じくするものも多い。このことから本稿で明らかにする性的少数者の様々なアイデンティティや差別・排除は性的多数者をも包含し得るものであり、性的多数者／少数者間や性的多数者間での多様性の承認や共生の促進にも与するものである。

3.2 データ分析上での理論的枠組み

これらの目的や展望からデータを分析する上で援用する理論や観点を示しつつ、ナラティブ研究においてアイデンティティがどのように論じられているかを概観する。まず、オクス（Ochs 1992; 1993）の言うように、アイデンティティは社会的ポジション、所属、役割、ステータスなど社会的カテゴリーの解釈と表出のプロセスであり、交渉される。さらに、社会言語学的インタビューにはインタビューというシチュエーションに関連したアイデンティティと、幅広い社会的カテゴリー（社会的階級、ジェンダー、年齢、人種など）や言語的背景に関連したアイデンティティという2つのタイプのアイデンティティが関係しており、両者は交差する（Schiffrin 2006）。

また、イェルガコポロ（Georgakopoulou 2006）などナラティブ研究者の間では、アイデンティティは日常的な言語的相互行為の中で構築され、自己や他者の意味を構築したり解釈するのに談話が用いられると考えられている。相互行為における参与者の役割から状況に応じたアイデンティティが組織化されるが、このような状況に応じたアイデンティティの共同組織化は、より大きな社会的アイデンティティを指向しており、これらは参与者のグループ内での役割、関係、ヒエラルキー、またジェンダーなどの要因と関連がある。また会話におけるアイデンティティは、多様な相互行為と関連付けられるとされている。つまりナラティブが見られる相互行為の場はアイデンティティ構築がなされる場であるということができ、ナラティブにおいて構築されたアイデンティティはその場に限定されないあらゆる状況や相互行為と関連しているといえる。最後に、語りを通して、カテゴリーによって表象される社会的グループへの帰属または反発がどのように交渉されているかが分かる（De Fina 2006）という観点に基づき、それらの交渉がどのようになされるか分析する。デ・フィーナは、社会的に共有されたグループの表象がどういったコンフリクトと結びついているかを明らかにするには詳細なテクスト調査に基づいたナラティブ分析が必要であると述べている。語り手が人種、ジェンダーといった社会的カテゴリーを位置づける際に使用する言語資源を精査すると、こうした一見異なるカテゴリーは語り手の談話の中で複雑に連結していることが分かる。またホームズ（Holmes 2006）は、人は個人間の（interpersonal）アイデンティティとグループ間の（inter-group）アイデンティティの構築的側面のプロセスに絶え間なく従事していることを主張している。つまりアイデンティティの構築プロセスには、インタビューという個人間の相互行為において構築される側面と、各人の所属するグループに基づいて構築される側面があると言うことができる。

まとめると、本研究ではこうした先行研究の知見に立ち、アイデンティティは状況に応じて交渉されるものであり、また、インタビュー内で表出されるアイデンティティにはインタビューという相互行為の上で状況に応じて表出されるものと社会的カテゴリー等と結びついたアイデンティティがあることを前提とする。またナラティブは相互行為内で生起し、ナラティブの中でアイデンティティ構築がなされるという考えから、そこで表出されたアイデンティティがどのように交渉・構築され、またどういったものと結びついているかを分析する。またそうした側面から、性的少数者である当事者が社会的グループとしての「性

的少数者」の間でどのようなコンフリクトないし排除に直面する（している）かを読み解くのが狙いである。

3.3 方法と対象者

筆者はこれまでに数名のインタビュイーの協力を得、それぞれに個別もしくは筆者（インタビュアー）対インタビュイー2名という形でインタビューを行った。ここではその内3件のデータを取り上げる。以下に、インタビュアー（筆者）を含めたインタビュー協力者のイニシャルと簡単な情報を表にまとめた。上段が筆者（A: インタビュアー）含むインタビュー協力者、下段がその属性である。なお、トランスクリプトに使用した記号は文末に記載する。

表1. インタビュアーおよびインタビュイーの属性

A（インタビュアー）	S（インタビュイー1）	I（インタビュイー2）	Y（インタビュイー3）
レズビアン／バイセクシュアル、日本人	ゲイ、アメリカ人留学生	FtMトランスジェンダー、日本人	レズビアン／バイセクシュアル、日本人

ここで扱うデータは全て個別のインタビューによるものである。インタビューはインタビュイーの意識的／無意識的に有するアイデンティティを導き出す（そしてそれらと性的少数者の相互差別・排除との関連性を明らかにする）目的から、なるべく自然な発話が得られるよう構造化せずに行った。ただし、インタビューの目的から話の内容が逸れすぎないよう、インタビューの開始時や途中にインタビュアーがなるべく不自然にならないようなタイミングで目的に沿った話題を投げかけた。その内容は、インタビュイーの自己の性の認識に関するものや、他の性的少数者への認識、また他の性的少数者の中での自己の位置づけに関するものである。

4. データ分析

上記3名のインタビュイーとのインタビュー結果を順に分析してゆく。なお、インタビューデータ1はインタビュイー1、インタビューデータ2はインタビュイー2、インタビューデータ3はインタビュイー3のデータに対応している。

4.1 データ分析——性的少数者の複合的アイデンティティ

ここでは、インタビュイーの複合的アイデンティティを精査するとともに、各インタビュイーが自己の性についてどのように語るか、すなわち相互行為内で性的アイデンティティをどのように構築するかに注目したい。こうした語りは同じ語り手による同じエピソードであっても、常に均質であるわけではなく、語られるたびに新しい「声」（桑野 2009）が与えられ、語り手のアイデンティティに新たな解釈が与えられている。言い換えるならアイデンティティが更新されていると言える。

まず、インタビュイー1（S）のデータから見てゆく。アメリカ人であるSは自己の性的アイデンティティを述べる際に、日本において「外国人」「白人」であるという人種的側面との関係を提示する。ここから、ゲイという性的指向（およびジェンダー）と、アメリカ人／外国人／白人という人種という複数のアイデンティティの枠組みと、その関係を省察することができる。Sはアメリカのゲイ男性にも言及し、日米双方のゲイ男性の間に見られる人種問題を扱う。

〈インタビューデータ2〉

（セクション番号は分析上トランスクリプトを分割した際のもの）

例1

（セクション2）

4. S: で　あの:(.)まあたぶん　<u>アメリカと同じ問題があるんだけど</u>
5. あの:(.)たとえばあの　<u>日本人は　あのよく日本人としか</u>
6. <u>付きあ　つか＊付き合いたくないと思う</u>
7. (.)
8. A: あ::
9. S: <u>アメリカ:(.)もそのような問題があって</u>[あの:
10. A: [°あ:そうなんや°
11. S: うん　<u>白人はよく白人とし　しか　付き合いたくない</u>

（略）

23. S: なんか:あの::(.)なんか　あの:(.)なんか突然ああ
24. あなんか　S君なんか　日本人も
25. イケる↑:て聞かれて　(.)あの:うん　うん普通まあなんか
26. A: @@@
27. S: なんていう　普通にイケる:
28. A: うん
29. S: あの:　なんか(.)みたい::なことって言って
30. あの:あの:::で　あの:彼は(に)
31. あ　僕(.)外国人無理(.)って言われた
32. A: [ええ::::　そう
33. S: [でなんか他の人も:なんか
34. まあ無理と言わなかったけど　うん　そのような(.)
35. A: そういう空気だった=
36. S: =うん
(略)
47. S: [アメリカ(.)で　あの:(.)でも　まああの:でも　たとえば
48. あの(.)まあこれが僕の(.)あの経験に基づいていないけど
49. A: ˚ん:˚
50. S: なんかネットで:あの:読んだ記事で　あの白人の人は
51. よく(.)あの:(.)なんかよく(.)
52. ˚なんて言うんだ˚(.)あの:˚no blacksとか˚
53. A: [˚うん˚
54. S: [˚no(.)わかる↑˚
55. A: ˚うんわかる˚
56. S: ˚うん　no　(.)にほんじ　あの:まあno blacksとか:˚
57. A: ˚うん˚
58. S: ˚no Asiansとか(.)[書く˚
(略)
110. S: まああの::ほとんどの、あの:日本人(.)のゲイ男性(.)は:
111. う:ん外国人:(.)に興味ないと思う
112. (.)
113. A: ˚ふ::ん˚
114. S: 大半は
115. A: なんでだろう
116. (.)
117. S: ˚う::んまあ˚(.)でも　それは日本の問題だけじゃないと思う
118. A: ˚あ:˚
119. S: アメリカも同じ
120. A: ˚さっき言ってた(.)[みたいに˚
121. S: [uh(.)　問題がある

Sは4行目で「アメリカと同じ問題があるんだけど」と前置きした上で、「日本人ゲイが日本人としか付き合いたがらない」という傾向を述べている。しかし直後にアメリカ人ゲイ男性にも同様の傾向があることを述べて自らの見解を相対化させている。11行目ではこの傾向が見られる対象をアメリカから「白人」へと広げ、より広い範囲での人種の差異の絡んだ事象として提示している。また23行目からは自身が客体となった具体的経験によって日本人ゲイ男性に外国人嫌悪的な傾向が見られるという見解を裏づけし、その後47行目からは再度フレームがアメリカに移行し、アメリカにおけるゲイ男性の外国人嫌悪という情報を裏づけている（ただしこちらは具体的経験に基づいた情報ではないと前置きされている）。この日米それぞれのフレームでのゲイ男性による外国人嫌悪の存在への言及は、Sがゲイ男性によるそれを日米のゲイ社会で共通する問題として認識していることの表れと考えることもできるが、同様に、自国での状況を持ち出すことによって批判を相対化し、日本のみを非難することを避けたとも言える。また、52-58行目では引用とはいえ発話内容が高度に外国人嫌悪的であるため、これを緩和するためあらゆるストラテジーがとられている。フィラー表現（「なんていうんだ」）（林編 2008）や小声化などがそれに当たり、発話内容へのためらいが読み取れる。54行目の「わかる↑」も、AがSの話を理解できていないような表明を何も行わなかったにも関わらずこの発話がきていることや（Aは直前の53行目で「うん」と相槌を打っている）Sの使用した英語もご

く簡単な内容であることから、質問というよりは発話へのためらいから来るフィラー表現であると考えられる。また56行目で「日本人」と言いかけてやめ、再度「no blacks」に言及した後、58行目で「no Asians」と言い換えているが、これらは対話相手であるAが日本人であるがゆえに配慮したと考えられる。Sは明示的に「こうした外国人嫌悪的な考えに自身は反対である」と述べてはいないものの、これらの発話内容への緩和ストラテジーから、こうした外国人嫌悪的な考えから暗示的に距離を置いていることが分かる。

次に、インタビュイー3（Y）のデータを見てゆく。YはAと同じ大学の性的少数者のサークルに所属している女性である。ここでは性的指向のほかに、女性であること、また日本人であることが自己や日本の性的少数者をとりまく環境についての語りに関与している。下記の例2はAとIが2人の入っている性的少数者サークルには女性のメンバーが少ないという点で合意し、その理由を考えるという文脈で、Yが意見を述べている。

〈インタビューデータ3〉

例2

（セクション1）

146. Y: 日本人の性格的なとこもあるんですかね
147. (.)
148. A: う::ん(.)性格
149. Y: なんか結構　たぶん　目立つの嫌うじゃないですか
150. A: うんうんうん
151. Y: で　女子は　尚更そうなるんかな

Yは女性メンバーの少なさは「目立つのを嫌う」という「日本人の性格」であり、「女性の場合は尚更そうなる」という見解を述べる。つまり国民性と女性性にその理由があると表明している（Aはこれに同意していない）。しかし例3でYは自身がサークルに入ってから1年ほど参加しなかったことを明らかにし、その理由を「男性メンバーばかり」だったことだと述べている。

〈インタビューデータ3〉

例3

（セクション4）

25. A: てか〜（サークル名）は何で知ったん
26. Y: 〜は　高校の友達です
27. A: ˚ん˚
28. Y: 高校の　G（ゲイ）の子:が 入ってて
29. A: ん::
30. Y: あ　入ってたんかな(.)ま一応入ってて
31. A: うん
32. Y: なんか　その子元々Gって知ってたんで　相談してたんですよ
33. A: うん
34. Y: で　存在教えてもらって
35. A: ふ:ん
36. Y: 入ったんはいいんですけど　なんか最初hhh(.)
37. いつ入ったかな　1年(.)の最初ぐらいに入って　で
38. 行ったら男子ばっかりで
39. A: ん↑
40. Y: 行ったら男子ばっかりで
41. A: あ:そうやなhh
42. Y: で　1年ぐらい行くのやめてhhhh
43. A: @@@
44. Y: で　2年な　2年じゃない　1年　なんか留年して
45. 暇になったから　まあ行こうかなみたいな感じでhhh
46. A: @@@　そういう感じやったんや

Yはサークルのメンバーが「男子ばっかり」であることを理由にサークルから足が遠のき、さらにその後参加するようになった理由は「留年して暇になったから」であると述べている。この対話からは「何故サークルには女性メンバーの数が少ないか」という問いへのそもそもの原因は明らかにはなっていない

が、女性メンバーが少ないが故にサークルから足が遠のいた、というYの話には、性的少数者女性が女性メンバーの少なさを目の当たりにして参加しなくなり、そもそも低い性的少数者女性のコミュニティ参加率を低いまま保持させているという一つの可能性が示唆されている。つまり、女性メンバーが少ないから参加が憚られるのであり、それ故に女性メンバーが増えないというサイクルが出来上がっている可能性がある。これと同じことは他の性的少数者サークルにおいても頻繁に聞かれ、男女混合の性的少数者のコミュニティは男性中心的になりがちであると言われているが、Yの発話にはこのことが示唆されている。

4.2 データ分析——性的少数者間の排除

4.1で扱ったSのナラティブには人種を軸としたゲイ間での排除の存在も示されている。例1では日米のゲイ間で生起する人種的排除が、S自身の面する排除との関連から表出されている。このほかの排除要因として、2つのレベルの規範の存在が示唆されている。異性愛規範とゲイ間に見られる規範である。Sはゲイ間に見られる規範についても日米双方のフレームで対比させている。下記では日本人のゲイの間で「女性っぽい人」「オネエ」が好まれないことが説明されている。

〈インタビューデータ I〉

例４

（セクション3）

16. S: ん:: なんか たとえ よくあの::(.) あのアプリ[2]とかで:
17. よく:(.) あの:(.) なんかノンケ[3]っぽい人が好きですとか(.)
18. あの:オネエ:下手(苦手？)ですとか あの::(.) 女性っぽい人とか
19. A: ああhhh
20. S: 好きじゃない(.) よく(.) そういうの[そういう(.)
21. A: [°あ::＊＊＊°
22. S: そのようなことが書いてる

森田（2003）は、ゲイの間では「男らしい」ゲイがより「優れている」と評価されることがあり、これはゲイによる「ゲイフォビア」「トランスフォビア[4]」であると述べている。また風間・河口（2010）はゲイの間で内面化された女性嫌悪や女性性嫌悪について言及している。上記の例ではこの傾向が端的に表されている。こうした傾向に対して、上記の例ではSは自身の立場を賛成にも反対にも位置づけていないが、暗示的に不賛同を表している。

〈インタビューデータ I〉

例５

（セクション3）

59. S: いかにも:(.) いかにも男性ていう人
60. A: ん:
61. S: があんまり 僕のタイプじゃない
62. A: あ、そうなん[だ
63. S: [た う:んなんかあの:(.) なんか
64. たとえばいつも なんていう(.) その:ノンケカップル:(.)
65. の男性と同じように振舞う人、が好き[じゃない
66. A: [ん:: ＊＊＊
67. S: あの:いつもリードをする人のことが:
68. A: 荷物持ってくれるよう[な
69. S: [う:ん
70. まあ別に なんかたまに:だったらいいんだけど
71. なんかもっと(.) あの:平等な交際がいい

59行目から71行目にかけてのSの発話は、Sの望む交際相手の男性についての内容である。「いかにも男性という人」「ノンケカップルの男性のように振舞う人」に好ましくない印象を抱いているという叙述は、異性愛規範への反発ととることもできるが、「男性性」の強い男性が好まれるゲイ間の規範への反発であるとも考えられる。また71行目の発話からは、こういった異性愛者の男性、「いかにも男性」的な男性の交際のあり方は平等ではないことが示されている。ここからは、Sが異性愛社会と同性愛社会双方における規範に抵抗し、外国人や「オ

ネエ」を忌避する傾向にあるゲイ男性とはその排他的思考を共有しないという形で自己を語っている（と同時にそのようなアイデンティティを構築している）ことが分かった。

次にインタビュイー2（I）のデータの分析に移る。インタビュイーIはFtMトランスジェンダーである。Iの語りでは、自他の位置づけやコミュニティの捉え方、またアイデンティティの表出から、性的少数者のコミュニティ内外で起こっている序列化および排除の構造が見て取れる。自身がトランスジェンダーである米沢（2003）はトランスジェンダーをめぐる排除の文脈の中で、トランスセクシュアルの中には「トランスジェンダーは下、自分たちは上」という序列意識の持ち主がいると述べている。また、レズビアンコミュニティからMtFが排除されることも多々あるという。Iの語りにも明示的または暗示的に序列化の事例が示されている。Iの語りには過去・現在の自分についての描写が散見され、ひとつなぎにはなっていないものの、全体としてIの個人史を形成している。人が個人史を語ることは、単なる自己の表象ではなく、相互行為的且つ行為的なアイデンティティ構築の一側面であると考えられている（Georgakopoulou 2006）ため、この過程はIのアイデンティティ構築として考えられる。この時表出されるアイデンティティはAの問いかけに影響されていることから、交渉されているともいえる。まずIの過去について語られるが、「普通の男」になりたかったという叙述が繰り返し行われる。

〈インタビューデータ3〉

例6

（セクション1）

204. I:　どっちかっていうとね　FtMの場合は(.)なんかもう俺はもう
205.　普通に生きてるしみたいな人が多いんですよ
206. A:　あ　そうなんか　[あ:
207. I:　[FtMで群がってというよりも
208.　俺はもう普通の男として生きてくからお前ら知らんし
209.　みたいな@@@なんか@@@
210. A:　@@@@h. あ::
211. I:　20代前半ってなんか結構そういう子が多いんですよ
212.　自分もそのうちの1人やったんですけど
213. A:　ふ:ん
214. I:　で結構25過ぎたあたりからぽつぽつとなんか
215.　横の繋がりが増えだしてっていう(.)感じなんですよね
216.　だからもう当時にコミュニティがあったら
217. A:　mm
218. I:　hhほんまに行きたかったなっていう
219. A:　あ::そっかそもそもな　無かった
220. I:　無かった(.)なと思います　まああったんかも知れないですけど

上記では「普通に生きてるし」「俺はもう普通の男として生きてくからお前ら知らんし」という過去の自分や他のFtMの発話の引用（reported speech: Goodwin 2010）が用いられており、ここでは過去の自分を含めた（特に20代前半の）FtMの「声」がIによって伝達されている。このFtMによる「普通の男」（MtFの場合は「普通の女」）へのこだわりについては三橋（2003）も言及しており、これは性別には「男女いずれかしかな」いと考える異性愛規範的な「性別二元論」の内面化であるという。Iが述べている他のFtMや過去のI自身にも同じことが言える。また、Iの一人称はほぼ「自分」であるが、上記に見られる「俺は普通の男として生きてくし」等の過去の自分や他のFtMの引用の時にのみ「俺」となるのも興味深い点である。「自分」が選択されている理由はおそらくジェンダーを指標する一人称の使用を避けたためであり、引用でのみ「俺」が使われているのは、発話内容から、過去の自分や他のFtMの男性性へのこだわりを強調しているものであると推測できる。また208行目において20代前半の頃自らと他のFtMを「お前ら知らんし」と差異化し、「FtMで群がって」いなかったことが表されているが、25歳を過ぎたあたりから（214行目）「横のつながり」、つまり他のFtMとのつながりができ始めたと述べられている。ここからは、他のFtMとの交流ができたことによりIの排他性が軽減され他者への受容につながったことが読み取れる。そのような過去のIの語りに対しAは「今はどうなんですかね」と現在のIについて問いかけ、これを受けて過去の自己から現在の自己へと

フレームが移り、過去との関連から現在の自己が構築される。Iは「普通の男」にこだわっていた過去の自分を現在の自分とは明確に差異化しており、以下の例ではそのことが顕著に表れている。

〈インタビューデータ3〉

例7

（セクション1）

482. A: 今は　今はどう:(.)なんです[かね
483. I: [今はね
484. いっときすごい悩んでた時期を経て　もう
485. 何でもええわっていうhhh気になんか
486. A: @@
487. 悟りをhh
488. I: 達してしまったというか
489. A: @@
490. I: なんか昔はすごい　すごいこだわりがあったんです
491. FtMじゃない　男になりたい　なりたいって思ってたんです
492. A: ああ　ああ
493. I: せやからすごいFtM　ばれたらどうしようとか
494. すごい過敏に[なってたんですけど
495. A: [へ::
496. I: 今はもう　別に聞かれたら普通に言うし
497. A: ん::
498. I: 別に男でないって言われたらもうそれでもいいし
499. 自分はもう自分かなって　ちょっと[思えるようになってきたんで
500. A: [あ:::
501. I: 自分自身ね　揺れてますねhhh
502. A: そうですね　ずっと　う::ん
503. I: 揺れますね　°そうですね°
504. 男　FtM　その境目　ですかね　境目↑
505. A: hhh
506. I: ほんとあのグラデーションの通りですよね
507. A: うん　そうですね(.)あのグラデーションもなんかあの
508. 一方向ではなくて
509. I: [う:ん
510. A: [すごい四方八方のグラデーションだなって

上記483行目より、Iは過去の自分への評価から現在の自分への評価、位置づけを開始する。自分はFtMではない、男になりたいという「すごいこだわり」があった過去の自分と比べ、現在の自分は「揺れている」「自分は自分」と、必ずしも男性性にこだわらないという意思が表出されている。またここでIは「グラデーション」という概念を用いて現在の自分の性を表しているが、後にも何度か「性の多様性」を表すのに「グラデーション」という言葉を使っている。グラデーションとは性の多様性を表すのにしばしば用いられる概念であり[5]、性的少数者に特に共有される言葉である。Aはこれに呼応し、「一方向ではなく四方八方の」と「グラデーション」の意味を肉付けする。この「グラデーション」はIとAに共通する「性的少数者」に関する知識スキーマ（Tannen and Wallat 1987; Tannen 1993）において共有されている概念であると言うことができる。イェルガコポロは、話者間で「共有された（shared）ナラティブ」や「共有された想定」を挙げており、これらはグループの存続に不可欠なものでありコミュニティの一部分を形成しているとしている。「グラデーション」はまさに多くの性的少数者のコミュニティまたはグループで共有されているナラティブの一つであり、その当事者であるIとAは「グラデーション」を引用・呼応することによって互いが「性的少数者」という同じ社会的集団に属していることを前提視および再確認しているといえる。またIが現在の自分の考えを示す際に重要であるのが、Iによる他のFtMに関する評価である。AによるFtM内での「ヒエラルキー」の存在を問われたIは以下820行目のように、手術（性別適合手術）の段階による「見えない線」の存在を明らかにする。またこの「見えない線」に、I自身は「疑問を感じる」と述べる。

〈インタビューデータ3〉

例8

（セクション1）

819. I:　[ただ：　思うのが：　手術の段階↑によってなんか
820.　　そういうのが　目に見えない線がなんかあるような感じ
821.　　はしますね
822. A:　手術の段階
823. I:　手術の段階
824. A:　あの：どの程度してる
825. I:　[そうそうそうそう
826. A:　[手術してるか
827. I:　今ちょっとそういうのに(.)いささか疑問を感じるんですけど
（略）
829. I:　ただあの　あの第1が胸オペですよね　で
830.　　第2ステージ　2が内摘　で第3ステージが　まあ外性器形成
831.　　つくる　でステージ3までいったら　ああ3までいってんすか：
832.　　みたいな@@@
（略）
841. I:　[でも結構今　遠藤まめ太[6]さんとか　ねえ
842. A:　はあ
843. I:　あの:::　なんて言うんですかもう　そのままで
844.　　いいんだっていうのを　言い出してから
845.　　結構自分もその考えに　すごい賛成なんですけども
846. A:　ん::
847. I:　要は　全部手術をかえないと　男じゃないとか
848.　　そういう発想自体がちょっと違うんじゃないか
849. A:　あ：
850. I:　まだ内摘してないのっていうの(.)＊＊胸オペだけ
851.　　なんですよ　内摘まだで戸籍も変換してないんで
852. A:　ん：
853. I:　あれまだ内摘（内臓=卵巣摘出？）してないのとかよく言われるんですよ
854. A:　へえ::
855. I:　えでもそれって　ゴール地点て　人によって違うし
856. A:　うんうんうん
857. I:　まだって　何なんてhhhh
（略）
872. I:　なんで　たぶん：ゆってる彼は(.)僕がまだ第1ステージしか
873.　　終わってないんで　若干のhh　手術するんやったら
874.　　俺が教えたんでみたいな

例9

（セクション2）

667. I:　なんでそういう::ね　もっと考えが　世に浸透したら
668.　　たぶんそういう手術カーストがhhなくなるんじゃないかなっていうhh
669. A:　[そうですよね
670. I:　[自分の思ってるゴールが：それがもういい　それでいいんだよっていう
671.　　のがわかればカーストなんてなくなるんじゃないか

例8の831行目、850行目、853行目、873行目、874行目ではいずれも、Iの思想と相容れない他のFtMの「声」が引用を通して表明されている。これらの「声」はIの言う手術の「第3ステージ」まで経験している人を高く評価し、手術の段階を進めることへの志向をいわば「自明の理」と考えている。しかしIはこれに同意せず、全ての手術を受けなければ男ではないといった考えは「発想自体が違う」、そして「ゴールは人によって違う」との考えを表明する。つまり引用で示された他のFtMの考えを、Iは否定的に捉えており自らとは線引きしているのである。IはこうしたFtM内での差異化を「手術カースト」と呼んでおり（例9）、これが単なる差異化ではなく序列化であることを明示している。先述

のデータ2では一部のゲイ男性がより「男らしい」ゲイがそうでないゲイよりも優れていると考えていることを、男女二元論を内面化したゲイによるゲイフォビア或いはトランスフォビアであると述べたが、身体がどの程度男性に近づいているかでFtMが序列化される現象もまた男女二元論の内面化によるFtM内のトランスフォビアである。また身体の男性性が低い／女性性の高いFtMを男性性の高い／女性性の低いFtMより下位に置くという観点で考えれば女性嫌悪であると言うこともできる。また、Iのナラティブを支える軸となっているものの1つに「遠藤まめ太」という人物の存在がある。Iによると「遠藤まめ太」氏はFtMのアクティビストであり、Iは何度か同氏を引き合いに出し、同氏と自分の考え方の親和性を表明している。ここでの語りにおける「遠藤まめ太」は、シフとノイ（Schiff and Noy 2006）の述べる「共有された意味（shared meaning）」の役割を果たしている。シフとノイによるとこうした「共有された意味」は社会的繋がりの一部として自己を理解する手段であり、語り手のナラティブアイデンティティを構成するのを助け、語り手が個人的経験を解釈し伝達するための言葉を与える。ここでは「遠藤まめ太」の主張及びそれへの同調が、Iが自己を理解するのに重要な役割を果たしており、Iのアイデンティティ構築を支えるものとして機能している。ここまでで明らかとなったのはFtM間の差異および序列化であったが、I、Aの対話には他のカテゴリーが主体／客体となったものも見られる。Iは自分をレズビアンだと思いレズビアンコミュニティに接触していた頃に（外見が男性に近いために）レズビアンからあからさまな排他的態度を受け「女性って怖い」と感じたという経験や、Iの知人のゲイが女性やFtMに対し差別的態度をとっているのを目の当たりにするという経験についても述べている。

4.3 データ分析——性的少数者の連帯可能性

前節および前々節で個々の性的少数者のアイデンティティが複合的であり得ること、また複合的に構築されることとその構築を通していかに性的少数者間の排除が語られるかを見てきたが、ここではそうした性的少数者の連帯の可能性を省察してゆく。まず前節の例7における「グラデーション」概念が、性的少数者に共有される知識として連帯の意味を帯びている可能性を示したい。

〈インタビューデータ3〉

例10

（セクション2）

50. I: グラデーションの　要はこの末端↑末端が偉いみたいな
51. 変なh考え方ですよね　だからグラデーションの中心に
52. 近づけば近づくほど要はこう何て言うんですか
53. うん　曖昧であれば曖昧であるほど　この(.)
54. 濃い人たちhは　言いがちですよね
55. それはすごい感じますね

Iの語りでは、受けた手術の段階によって序列化を行うFtMや他のカテゴリーに対し排他的態度をとる人々がグラデーションの「末端」であり、手術の段階が「進んで」いないFtMやバイセクシュアルは「中心」に位置づけられる。また前者を「濃い人たち」とも表現している。しかし「末端」「中心」に位置する人々の間にこうした差異があるとしつつも、いずれも「グラデーション」という同一のスケール上に位置しているということが暗示されている。つまりカテゴリーや思想に差異はあるものの、「グラデーション」という領域を共有しているという認識がある。このことが以下の発話にも表れている。

〈インタビューデータ3〉

例11

（セクション2）

75. I: hhhもうそういう人たちがいるんでhh同じマイノリティで
76. ほんまやったら手を取り合って頑張ろうって言わないかんのに
77. マイノリティどうしで苦しめあってるみたいな
78. A: そうそうそうそうだからむしろそっちの方が私なんか
79. 深刻なんじゃないかと思う時がある
80. I: 結局自分もね　あの参加して　そうなんやって学んだ部分が

「同じマイノリティで」「マイノリティどうしで」という発話からも、序列化や

排除の主体となる人も客体となる人も「マイノリティ」というカテゴリーを共有しており、同じ社会的グループの成員であることが暗示されている。ここまでで、先行研究から性的少数者のカテゴリーの差異がベースとなった序列化、またデータからFtMコミュニティ内、レズビアンコミュニティ内にも序列化が存在することを証明した。

5. 分析結果の考察

以上データ分析結果を踏まえ、本稿における目的と照らし合わせて結果をまとめたい。まず、性的少数者の複合的アイデンティティ（4.1）の省察から、当事者の「生きられた経験」は多元的アイデンティティとその構築に伴い多元的に経験され語られることが分かった。このアイデンティティの複合性は性的少数者間の排除（4.2）とも関連して語られている。また性的少数者間の排除の語りには、2.3で紹介した性的多数者から少数者への排除との共通点が見られる。性的多数者の男性がゲイ男性を排除する要因として、「同じ方向を向かない」異質な人間という認識と自らの「男らしさ」アイデンティティの保持を挙げたが、Sの語り（例4）で述べられているゲイによる「オネエ」の排除はまさに、「男らしさ」アイデンティティの誇示に起因すると考えられる。またIの語りにおけるFtMの「普通の男」へのこだわり（例6）や手術の段階による序列化（例8）にも、「男らしさ」アイデンティティとの関連がうかがえる。さらに、手術の段階を進めてより身体を男性に近づけることへの志向性がいわば前提視されているという事例からは、身体を男性に近づけることを必ずしも志向しない人、言い換えると「同じ方向を向かない」人が無意識に排除されている可能性が示唆されている。最後に性的少数者の連帯可能性（4.3）であるが、例10、例11でのIの語りに見られる「一体感」が連帯可能性を示しているのではないだろうか。ここではIは「同じマイノリティ」であるAに対し「グラデーション」といった（I、A両者を包含する）概念を用いており、繰り返しになるがこれはAがこの概念の指すものを知識として共有しているとの想定からなされている。つまり、「同じマイノリティ」＝性的少数者が自己のアイデンティティを解釈する概念として共有していると想定されているのが「グラデーション」なのであり、Aが当然これを共有しているものとIが想定していたことそれ自体が、性的少数者間での「グラデーション」概念の有力さを表している。さらに例9ではIは「ゴール（手術の段階）」は人それぞれでいい、と述べており、抜粋箇所外においても「性的少数者は相互の差異を認識すべきである」といった趣旨の発話がなされている。これらの主張は、FtM間においても異なるカテゴリーの性的少数者間においても、個々の人々の差異が認識されるべきであり、且つ否定されるべきでないという主張に言い換えることができる。上野は被差別者間の連帯を可能にするものとして、被差別者の解放思想に「差異の承認」が共通していることを挙げているが、Iの語りから表出されているのはまさにこの差異の承認と合致するものである。これは個々人の「生きられた経験」の多様性への承認でもある。しかし、単に相互の差異が承認されれば（或いはそのような場があれば）問題が解決されるわけではない。Yのデータ（例3）からは、性的少数者サークルに参入しなかった（できなかった）理由として、女性メンバーがいなかったことが挙げられている。つまりYにとっては単に「同じマイノリティ」の集まる場、差異の承認がなされる場があればいいのではなく、「同じマイノリティ」のうち「同じ女性」の存在が重要だったのである。上記の考察結果と先行研究によるゲイの集合性の分析から、性的少数者全体をめぐる連帯可能性を考えてゆく。

6. 結論

森山（2012）は「ゲイコミュニティ」と呼ばれるようなゲイ男性の集合性に「ついていけなさ」（集合性との心理的距離やそれへの疎外感）を感じるゲイ男性の存在に着目しその要因を分析しており、「なにごとかを共有することを強制されているとゲイ男性に感じられ、そのことでゲイ男性の生を苦しくさせている」「やわらかな締め付け」の存在に言及している。また、ゲイコミュニティやそのあり方をめぐってなされてきた議論が、個々のゲイ男性に対してゲイコミュニティ「特有」のライフスタイルへの順応を規範化してしまうリスクを孕んでいることを、森山は指摘している。本稿においても、ゲイであるSのデータ（例4、例5）にはゲイ間に共有される規範の存在が示唆されている。FtMであるIやレズビアン／バイセクシュアルであるYの対話データからはコミュニティを規範

化する議論の存在は明示されていないが、「同じマイノリティ」という連帯感だけでは、様々なニーズや価値観を持つ当事者の多様性が覆い隠され、コミュニティは均質化されてしまう。森山はゲイ男性のつながりを、「ゲイ男性全体の可能的な接触の様態としての総体的なつながり」と「セクシュアリティにもとづく二者（以上）の排他的な関係という意味での特権的な他者とのつながり」に分類し、この2種類のつながりの関係や構図が、ゲイの集合性に「ついていけなさ」を生じさせる要因であるとしている。そしてこの「特権的な他者とのつながり」こそがゲイ男性の集合性をほかのマイノリティ集団から差異化するものであり、同じ特徴がレズビアンの集合性にも存在するはずであると述べている。確かに、森山の言うようにこの2種類のつながりの構図に影響するものとして同性間の婚姻制度が無いことや、ゲイ／レズビアンにとって「全体社会」となるものの存在が曖昧であることがあるとすれば、レズビアンの集合性においてもある程度はゲイと同じことが言えるはずである。実際、レズビアンの集合性においても森山の述べる2種類のつながりは（少なくとも筆者の感得する限り）存在するが、杉浦（2010）の言うようにレズビアンの場合は欲望や主体性をゲイよりも不可視化される傾向にあるため、「全体社会」はゲイの場合よりさらに曖昧であることが推測される。以上からこうしたつながりの関係およびそこから生起する「ついていけなさ」はゲイおよびレズビアンを他のマイノリティ集団から差異化するものであると言えるが、これが他のカテゴリーの性的少数者にも当てはまるかどうかは定かでなく、個々の当事者の語りなどを省察して明らかにしてゆくほかない。もっとも、FtMであるインタビュイーのIが抜粋箇所外で「FtMコミュニティ内では恋愛関係に起因する人間関係のもつれは無い」という趣旨のことを述べている点や、恋愛感情や性的欲求を持たないアセクシュアル（無性愛者）といった人も存在することを考えると、ゲイ／レズビアン以外のカテゴリーの性的少数者の人々の集合性は全く異なるものである可能性も十分考えられる。多様な性的少数者の個々の当事者の複合アイデンティティや語りから排除を考える上でも、また多元的な生を生きる当事者間の連帯可能性を考える上でも、今後より多様な人々の語りを精査してゆく必要がある。

付記：トランスクリプト記号について

:	直前の音の引き延ばし	( )	著者による補完		
(.)	ポーズ	@	笑い	[	オーバーラップ開始
＊	聞き取り不能	＿	分析上の強調	°°	比較的小さな声での発話
↑	上昇イントネーション	＝	ラッチング（ターン交代がポーズなく行われること）		

注

1 一部のトランスセクシュアルが既存のジェンダー秩序に則った「女らしさ」「男らしさ」に執着し、トランスジェンダーやトランスヴェスタイトを排除する動き。

2 ここでは一般的な意味での「アプリケーション」でなく、同性愛者が出会いを得るツールとしてのアプリケーションを限定的に意味する。

3 ヘテロセクシュアル、異性愛者。

4 トランスジェンダーやトランスセクシュアルに対する嫌悪。

5 東京レインボープライドホームページ（http://tokyorainbowpride.com/whats-lgbt/）など参照。（2015/09/30アクセス）

6 Iにより「FtMのアクティビスト」と説明されている人物。

参照文献

赤枝香奈子
2010 「意外に知らないあの言葉――百合」井上章一・斉藤光・渋谷知美・三橋順子編『性的なことば』pp.277-286、東京：講談社。

池田久美子・岡部芳広・木村一紀・黒岩龍太郎・高取昌二・土肥いつき・宮崎留美子／セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編
2003 『セクシュアルマイノリティ――同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』東京：明石書店。

石田仁
2010 「意外に知らないあの言葉――薔薇」井上章一・斉藤光・渋谷知美・三橋順子編『性的なことば』pp.270-276、東京：講談社。

上野千鶴子
1996 「複合差別論」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『差別と共生の社会学』pp.203-232、東京：岩波書店。

風間孝・飯田貴子
2010 「男同士の結びつきと同性愛タブー――スポーツをしている男性のインタビューから」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』pp.93-124、東京：明石書店。

風間孝・河口和也
2010 『同性愛と異性愛』東京：岩波書店。

カメロン、デボラ、ドン・クーリック
2009 『ことばとセクシュアリティ』中村桃子・熊谷滋子・佐藤響子・クレア・マリィ訳、東京：三元社。

桑野隆
2009 『危機の時代のポリフォニー』東京：水声社。

杉浦郁子
2010 「レズビアンの欲望／主体／排除を不可視にする社会について――現代日本におけるレズビアン差別の特徴と現状」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』pp.55-91、東京：明石書店。

竹内瑞穂
2014 『「変態」という文化』東京：ひつじ書房。

林宅男編
2008 『談話分析のアプローチ』東京：研究社。

堀あきこ
2010 「ヤオイはゲイ差別か？」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』pp.21-54、東京：明石書店。

三橋順子
2003 「日本トランスジェンダー略史（その3）――1990年代後半～現在」米沢泉美編『トランスジェンダリズム宣言　性別の自己決定権と多様な性の肯定』pp.119-129、東京：社会批評社。
2008 『女装と日本人』東京：講談社。
2010 「トランスジェンダーをめぐる疎外・差異化・差別」好井裕明編『セクシュアリティの多様性と排除』pp.161-191、東京：明石書店。

森田MILK
2003 「TGブランチ発足から「約束事」へ」米沢泉美編『トランスジェンダリズム宣言　性別の自己決定権と多様な性の肯定』pp.156-168、東京：社会批評社。

森山至貴
2012 『「ゲイコミュニティ」の社会学』東京：勁草書房。

米沢泉美
2003 「おわりに――性別の多様性を」米沢泉美編『トランスジェンダリズム宣言　性別の自己決定権と多様な性の肯定』pp.202-210、東京：社会批評社。

Cameron, D.
1997 Performing gender identity: young men's talk and the construction of heterosexual identity. In A. Jaworski and N. Coupland (eds.) *The Discourse Reader*, pp.419-453. New York: Routledge.

Chesebro, James W. (ed.)
1981 *Gayspeak: Gay Male and Lesbian Communication*. New York: Pilgrim Press.

De Fina, A.
2006 Group identity, narrative and self-representations. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.) *Discourse and Identity*, pp.351-375. New York: Cambridge University Press.

Georgakopoulou, A.
2006 Small and large identities in narrative (inter)action. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.) *Discourse and Identity*, pp.83-102. New York: Cambridge University Press.

Goodwin, C.
2010 Interactive Footing. In E. Holt and R. Clift (eds.) *Reporting talk: Reported Speech in Interaction*, pp.16-46. Cambridge: Cambridge University Press.

Holmes, J.
2006 Workplace narratives, professional identity and relational practice. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.) *Discourse and Identity*, pp.166-187. New York: Cambridge University Press.

Ochs, E.
1992 Indexing fender. In A. Duranti and C. Goodwin (eds.) *Rethinking context*, pp.335-358. Cambridge: Cambridge University Press.
1993 Constructing social identity: a language socialization perspective. *Research on Language and Social Interaction*.26(2): 287-306.

Powell, R
2011 Frames and Narratives as Tools for Recruiting and Sustaining Group Members: The Soulforce Equality Ride as a Social Movement Organization. *Sociological Inquiry* 81(4): 454-476.

Schiff, B. and C. Noy
2006 Making it personal: shared meanings in the narratives of Holocaust survivors. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.) *Discourse and Identity*, pp.398-425. New York: Cambridge University Press.

Schiffrin, D.

2006 From linguistic reference to social identity. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.) *Discourse and Identity*, pp.103-131. New York: Cambridge University Press.

Tannen, D.
1993 *Framing in discourse*. Oxford University Press.

Tannen, D. and C. Wallat
1987 Interactive Frames and Knowledge Schemas in Interaction: Examples from a Medical Examination/Interview. *Social Psychology Quarterly* 50(2): 205-216.